

昭和26年3月 九州大学工学部土木科 卒後、長野県土木部へ就職。昭和31年 オリエンタル建設(株)入社、仙台支店長を経て昭和55年より大輝測量(株)設計部門の責任者として今日に至る。

「六十歳からのエンジョイライフ マッチ棒クラフト」

事情があって、それまで在籍していた建設会社を定年の2ヶ月前に敢て自己都合退職して、小さな測量設計会社に転職した。

その頃の或る日、デパートの家具売場で、サイドボードの上に飾られた模型帆船に目が止まった。15世紀末の頃、黄金の島ジパングを求めて、探検航海に出たコロンブスのサンタマリア号だった。長い年月大洋の荒浪や潮風との苦闘をしのばせるその風姿は、まさしく男のロマンを感じさせるものだった。

私はポケットを探って、ありあわせの紙片にその帆船をスケッチして帰り、側面図・平面図・断面図を半ば想像を混ぜて引き、早速制作にとりかかった。

この時、脳裏に閃いたのがマッチ棒だった。 そうだ何から何まで徹頭徹尾マッチ棒で作ってみよう。喫茶店の広告マッチから大型の徳用マッチまで貪欲に集めて、一本一本木工ボンドで貼っていった。これがその後26年以上も延々と続いている私とマッチ棒の深いつき合いの始まりだ。

その後間もなく、いろいろな木造帆船のキットや図面を知り、また電話帳からマッチの軸木工場を見つけて、マッチ棒クラフト制作のバックグラウンドが一応整い、私の造船技術と制作意欲は一気に向上加速した。

指導書も無ければ先生も居ない。船体は勿論、帆柱も碇もランタンも、更に豆粒ほどの滑車もマッチ棒で作るのだ。工夫と試行錯誤を繰り返すので頭と指先の刺激訓練になる。根気と時間は幾らあっても良い。まさに高齢者向きと云っても良いだろう。

次に手がけたビクトリー号から続いて、クローン、サンフェリーペ、バウンター、咸臨丸、ベネチアのガリレオ船、ギリシャの軍船、支那のジャンク・・・、しかも何でも2隻ずつ作ったので、26年間で40隻以上のモデルシップを作ったことになる。

帆船を作っていると、時々いろいろな想が頭をよぎる。材料がマッチ棒だから木質のものがふさわしい。幌馬車、電気スタンド、大小の額縁、ドールハウスの家具・・・、これらを手がけていると更にまた新しい想が技を出す。発想は限りなく広がっていく。街を歩いていても、新しいヒントを求めて、展覧会やウィンドーショッピングが楽しい。こうして作品の領域は広がっていき、最近では高さが優に1米を超す、羽黒山五重塔と瑠璃光寺五重塔(何でも国宝)がマッチ棒で完成した。

近年はマッチ棒から更に発展して、卵の殻のモザイク貼り、広告やパンフレットを利用した豆本作り、古切手を利用したポスター、ワインのコルクを利用したのれん等、不用品を活かしたクラフトに領域を広げている。

中世の錬金術士たちは、銅や鉛から金をと云う夢はついに実現できなかったが、この無代価かそれに近い安価な材料から、個性豊かな面白い作品を作り出している私の工房を、錬金術士たちの心意気にあやかって、錬金工房と名づけている。

日本ホビー協会のホビー奨励賞(2000)

内閣官房長官のエイジレス賞(2001)

読売新聞のニューエルダーシチズン賞(2002)

ワンダフル・サードエイジ2005(2005)

など幾つかのご褒美も頂いた。

唯今86歳、8年前に妻に先立たれ、先頃から当地のケアハウスに入居中、第2の勤めは非常勤ながら現役だ、郷里の土地を活用してアパートを経営中、そして時々旅行と充実した健康な生活を送っている。